

や移動に要する援助者の時間を多数で共用し、実援助時間以外の援助者の拘束時間を節約できます。一人の援助者が、多数者を見守ります。こうした理由で、一人の援助者が多数の障害者に援助行為を行うことができるようになります。私たちの施設を例にとると、利用者(入所とショートステイ)1人に対し職員は11人います。(こんなに職員がいるのかと他の福祉施設から言われますが、すべて常時見守りを要する重度障害だから当然です)。この値は、前述の在宅人工呼吸器使用者例1人に対し看護師5人と比べれば、大きな差異です。これはスケールメリットによる効率化です。ヒトの働きを効率的にして、限られた人手で、サービスの質を保ちながら、よりたくさん障害者にサービスを提供できるようにしなければなりません。効率化という言葉は、福祉に馴染まないように思われるかもしれませんが、人手の掛かる職種である福祉こそ、最も効率化が問題となると私は考えます。専門性が高く、少数しかいない援助者(看護師です)の効率的業務配分はさらに重要です。

ももちろん、大規模施設の弊害はあります。画一的で個性を尊重しない、閉鎖的で地域社会との交流がない、この二点がよく言われる弊害です。しかし、いずれも、施設が意識すれば改善できない問題ではありません。

もうひとつ、無視できない在宅の弱点は、援助に必要なモノの問題です。障害ゆえに普通の日常生活用具が使えず、特殊で高価にならざるをえないものがあります。その代表が特殊浴槽です。この点も、多数者で共用できる施設の有利な点です。

以上のように施設は重度障害者にはなくてはならないものです。施設を悪とする論は絶対容認できません。



はじめまして

課長 細川 智子

この度、聖隷三方原病院F3病棟より西棟に異動で参りました。看護師としての経験年数は、18年目となります。前病棟では、整形外科の領域で成人から老年の看護をさせていたが、また整形外科としての経験も最長だったこともあり、自分としても十分満

足のいくものでした。しかし、わずかに転機が訪れたのは、「育児休暇明けより「訪問・看護相談室」に異動した際、在宅看護がとて自分にとってやりがいを持てるかと確信できたことでした。

それまでの自分は、療養生活の場が、病院から自宅にシフトするイメージができていなかった。治療は、一旦病院で完結するものである。と、なんとも浅い考えを持っていました。しかし、在宅医療は自分の浅いイメージを全く覆すものでした。退院後、不安定な環境での介護者の不安への対応や、突然起こる予測不能な状況への臨機応変な判断と対応・示唆など経験の浅い自分にとって新鮮かつ不安なものでした。しかし、こんな経験を通し感じたこと、それは「何より入院中の患者さんとは表情が違う!」ということでした。利用者さんは、心細さや不安を見せるどころか、穏やかで、入院中には見られなかった安堵の表情。陰しく緊張した表情で何う自分を癒してくださるような表情でした。そんな表情を見ながら、自分は、入院中にもう少し何かできることがなかったのだろうか?もう少し早く安心できる場所に帰ることがで

きなかつたのだろうか?など、様々な思いが込み上げる場面もありました。

こんな体験が自分のターニングポイントとなり、十数年勤めた急性期の領域から在宅により近い領域への転機となりました。しかし実際に今まさに直面している重度心身障害児(者)の看護・生活介護は全く初めて経験することであり、今後も戸惑うことが多いと思いますが、過去の経験を生かし、未知なる経験を吸収しながら成長し続けたいと思っています。異動後、1ヶ月半が経過し、これからの自分に向けて、この聖隷おおぞら療育センターで何が出来るのかを考えてみました。医療と生活介護が様々な場面や状況において混在する中、スムーズな連携と融合ではないかと感じています。移管後、まだ歴史の新しい中で連携と融合は決して容易なものではないと思っています。しかしながら、新しい世代の自分たちに任されていること、つまりそれは、先人たちが築きあげた聖隷三方原病院の80年の歴史、そしておおぞら療育センターの40年の歴史を大切に継承し、聖隷おおぞら療育センターの新たな歴史を築いていくことだと思っています。私

たち職員一人一人が【働く】ことへのプライドを持ち、高いモチベーションで利用者一人一人に最善の還元をしようとする。未熟者ではありませんが、今後とも末永くよろしくお願ひします。

(おおぞら西棟)

▼ 浅井 明美

2月に育児休暇を終えて、仕事復帰しました。復帰には不安もありましたが、また、訓練の仕事ができることに喜びもあつたように思います。

患者さんが上手くできるよになつたり、頑張っている姿を見て家族の方に喜んでもらえる、この仕事をすることで良かったと感じます。

小さなお子さんは、楽しくなければリハビリはしてくれません。本人の発達と運動障害に合った遊びを治療の中で提供する必要があります。お子さんが楽しんで遊んでいる中で上手く治療をできたときは嬉しく感じます。少し大きくなつた方になると、遊びで